



**Data**

監督・脚本・製作: スコット・クーバー

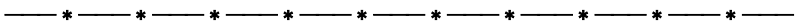
出演: クリスチャン・ベール/ロザムンド・バイク/ウェス・スチューディ/アダム・ビーチ/ベン・フォスター/ロリー・コクレイン/ジェシー・プレモンス/ティモシー・チャラメ/ポール・アンダーソン/ジョン・ベンジャミン・ヒッキー/スティーブン・ラング/ビル・キャンブ

## 👁️👁️ みどころ

ハリウッド発の西部劇といえば、誰でもジョン・フォード監督とジョン・ウェインを思い浮かべるが、そこでは、騎兵隊がインディアンを退治する姿が定番だった。しかし、1950年代のそれから50年も経つと、西部劇そのものが大きく変容。直近の『ゴールデン・リバー』(18年)と同じように、本作も異色の西部劇だ。

土地は誰のもの?それは、土地バブルが吹き荒れた1980年代後半の日本の大問題だったが、余命いくばくもないシャイアン族の族長をニューメキシコ州からモンタナ州まで護送する任務を負ったジョー・ブロッカー大尉が、多くの犠牲を払ってやっと目的地にたどり着いたとき、彼に突き付けられたのもその問題だ。

さあ、「俺の土地にインディアンを埋めるな」「俺の土地から出て行け」と“地主”(?)から言われた彼の対応は?原題の『HOSTILES』、邦題の『荒野の誓い』の意味を考えながら、インディアン戦争が終了した1892年当時を舞台とした異色の西部劇をしっかりと味わいたい。



## ■□■昔の西部劇は?1892年の西部劇は?■□■

日本映画ではかつては時代劇とチャンバラ映画が主流だったが、今ではその数はめっきり減っている。それと同じように、アメリカ映画ではかつては西部劇が主流だった。中でも、1950年代のジョン・フォード監督とジョン・ウェインはその代表格で、そこではインディアン(=先住民)と戦う騎兵隊の姿がいかにもカッコよかった。しかし、196

0年代後半にマカロニ・ウェスタンが大ヒットしたように、アメリカの西部劇は時代の流れの中で大きく変貌を遂げながら、今ではめっきり減ってしまった。しかし、今の日本でも中島貞夫監督の『多十郎殉愛記』(19年)のようなチャンバラもの名作が公開されたように、アメリカでもたまたま『ゴールデン・リバー』(18年)や本作のような西部劇の名作が公開されている。

『ゴールデン・リバー』は、1848年1月に起きた“ゴールドラッシュ”の時代における4人の男たちの生きざまを描く面白い西部劇だった。それに対して、本作はインディアン戦争がインディアン(=先住民)の敗北で終焉を迎え、フロンティアの消滅によって西部開拓時代を終え、産業革命による新たな時代が始まろうとする1892年の西部劇だ。明治維新が1868年、大陸横断鉄道の開通が1869年、そして日清戦争が1894～95年、米西戦争が1898年だから、そんな歴史の流れの中で1982年の西部劇をしっかり位置づけたい。

## ■導入部は『イングリシアス・バスターズ』を彷彿！■

本作導入部は、時代も舞台も異なるが、クエンティン・タランティーノ監督の『イングリシアス・バスターズ』(09年)の第1章で見た残忍な殺しの物語を彷彿させるもの。そこでは、残忍なナチス将校によって家族が皆殺しにされる中、ただ1人生き延びたメラニー・ロラン扮するユダヤ人美女が印象的で、彼女はその後の物語で大きな役割を果たしていた(『シネマ23』17頁)。それと同じように、本作導入部では、人里離れた荒野で暮らすクウェイド家がコマンチ族の残党の襲撃に遭い、夫も子供たちもすべて命を奪われる中、必死に森の中に逃げ込んだ妻のロザリー・クウェイド(ロザムンド・パイク)だけが生き延びる姿が描かれる。

早い段階で馬や銃を取り入れたコマンチ族は、18世紀から19世紀にかけて平原地域で大きな勢力を持っていたため西部劇では有名だが、インディアン戦争が終わった1892年ともなれば、コマンチ族に襲撃される事態などあり得なかったのでは？そんな疑問もあるが、それはともかく、この導入部のインパクトは強烈！しかして、『イングリシアス・バスターズ』では、たった1人生き延びたメラニー・ロラン扮する美女はその後に展開する物語で大きな役割を果たしたが、本作でただ1人生き延びたロザムンド・パイク扮する人妻ロザリー・クウェイドはその後の物語でいかなる役割を・・・？

そんな思いでこの導入部を観た後、ストーリーは一転し、ニューメキシコ州のベリンジャー砦の軍人ジョー・ブロッカー大尉(クリスチャン・ベール)が登場する。ジョーは今、戦争犯罪人のアメリカ・インディアンを収容した刑務所の看守を務めながら、“退役”を待っていた。そんなジョーに対して、上官は末期ガンに侵されている収監中のシャイアン族の族長イエロー・ホーク(ウェス・ステューディ)と彼の家族を、インディアン居住地となった彼らの故郷モンタナ州に護送する任務を与えたが、ジョーは断固拒否。それは、戦争

で多くの友をインディアンに殺されたジョーは、インディアンは刑務所に閉じ込めておくべきだという考えだったからだ。しかし、軍隊勤務では上官の命令は絶対。それを拒否すれば軍法会議ものになる上、年金ももらえなくなるぞと脅されると、やむなくジョーはその任務を引き受けることに。

## ■□■ニューメキシコからモンタナを目指して！地理を明確に■□■

中国も広いが、アメリカも広い。1892年に開通した大陸横断鉄道は、“横断鉄道”と名付けられているとおりに東西に走るもので、東部のシカゴから西部のサンフランシスコまで敷設されたものだ。なお、これはユニオンセントラル太平洋鉄道で、それ以外にも北太平洋鉄道、サンタフェ鉄道、南太平洋鉄道があるらしい。他方、1848年にカリフォルニアで金が発見されたことによって、“ゴールドラッシュ”が加速していく中で、西部のフロンティアを開拓していく歴史も加速した。そこで必然的に発生したのが、フロンティアの先住民たるインディアンとのインディアン戦争だ。1890年に「フロンティアの消滅」が宣言されたことによってインディアン戦争も急速に終結に向かったが、残党の活動はなお散発していたらしい。その1部が本作導入部におけるコマンチ族の活動だ。これらの話はよくわかるのだが、導入部の事件が起きたクウェイド家はどこにあるの？そもそもベリンジャー砦のあるニューメキシコ州はどこにあるの？そして、シャイアン族たちの故郷であるモンタナ州はどこにあるの？

本作はある意味で、ベリンジャー砦を出発した“ジョー大尉ご一行”が、ニューメキシコ州からモンタナ州に向かうまでのロードムービーだから、それらの地理（＝位置関係）をしっかりと頭に入れておく必要がある。本作のパンフレットには、野口久美子氏（明治学院大学国際学部准教授）の解説があり、そこに掲載されている年表と地図をしっかりと勉強すれば、本作を描いた「1892年のアメリカ」がよくわかる。ニューメキシコ州はアメリカの南西部に、モンタナ州は北西部にあり、本作のジョー大尉ご一行の中継地点として登場するコロラド州はちょうど真ん中にある。また、ジョー大尉ご一行は出発してすぐ、クウェイド家の焼け跡に一人放心状態で赤子の亡骸を抱いて座り続けているロザリーを発見したから、クウェイド家はニューメキシコに近いところにあるはずだ。モンタナを目指すジョー大尉ご一行のロードムービーの中で描かれる「荒野の誓い」をしっかりと理解するためには、まず地図によってそれらの位置関係を明確にしておきたい。

## ■□■『HOSTILES』の意味は？邦題とどちらがベター？■□■

本作で主役のジョー役を演じたのはクリスチャン・ベール。彼の代表作は『ダークナイト』3部作（05～12年）（『シネマ21』25頁）だろうが、私にとっては、『3時10分、決断のとき』（07年）（『シネマ23』23頁）、『ザ・ファイター』（10年）（『シネマ26』35頁）や、直近の『バイス』（18年）（『シネマ45』掲載予定）等での演技の方が印象深い。昭和

の日本を代表する俳優・石原裕次郎には、明るい太陽や海そしてムード歌謡が似合ったが、黒澤明監督が重宝し、日本を代表する俳優になった三船敏郎の代名詞は「男は黙って・・・」。そう、私生活はともかく、スクリーン上の彼の役は“寡黙さ”が売りだった。

本作でインディアンの実態を正確に表現することを目指したスコット・クーパー監督は、シャイアン族の族長イエロー・ホーク役にホンモノのチェロキー族の俳優を起用したが、当然彼らのセリフは必要最低限に抑えている。しかして、同監督はクリスチャン・ベール扮するジョーも、三船敏郎と同じく「男は黙って・・・」タイプに設定した。親友と退役について語り合う時のジョーは少し饒舌だった(?)が、しぶしぶイエロー・ホークを護送する任務を承諾し、“ジョー大尉一行”の指揮官としてモンタナに向けて出発してからのジョーは終始寡黙だ。

ところで、本作の邦題は『荒野の誓い』だが、原題は『HOSTILES』。邦題はかなりボンヤリしているものの、何となく言いたいことはわかるし、スコット・クーパー監督が設定した135分の本作を観ていけば、人それぞれにそのイメージを固められるはず。しかし、『HOSTILES』って一体ナニ？日本人の通常の英語力では、その意味はわからないのでは・・・？「HOSTILE」は形容詞なら「敵の、敵国の、敵意のある、敵性を示す」もので、名詞なら「敵」で主に複数形で用いられる。しかして、スコット・クーパー監督が本作の原題を『HOSTILES』とした狙いは如何に？そして、あなたはそれをどう解釈？

## ■□■昨日の敵は今日の友！“共通の敵”と戦うには？■□■

『ゴールデン・リバー』(18年)は、ゴールドラッシュ直後の1851年当時を舞台とした異色の西部劇だったが、1892年のインディアン戦争終結当時を舞台とした本作は、それと並ぶ異色の西部劇。そこで共通するのは、共通の敵が出現した時の対処法だ。『ゴールデン・リバー』では、金でキラキラと光る川を前にして、主人公のシスターズ兄弟は、自分を裏切った連絡係のモーリスたちと手を組み、自分たちを襲ってきた殺し屋集団に対処していた。

それと同じように、本作では、ニューメキシコ州のベリンジャー砦を出発するやいなや、護送すべきイエロー・ホークとその息子の足に鎖をかけて敵とみなしていたものの、ジョー大尉一行が白昼の荒野でコマンチ族の急襲に遭い、死傷者が出てしまうと、イエロー・ホークから「力を合わせなければ、我々は殺される」と言われたジョーが彼らの鎖を外し、“共通の敵”に対処する姿が登場する。もともと、この時点ではジョーとイエローの関係は、日露戦争終了後の「水師營の会見」で、乃木大将とステッセル中将が「昨日の敵は今日の友」と謳われたほど友好的ではなかったが、モンタナへのロードムービーである本作後半以降は、ジョーとイエローとの信頼の絆が次第に堅固なものになっていくので、それに注目！

## ■□■中継点からはさらに大変な任務も！■□■

本作でロザリー役を演じたロザムンド・パイクは、9月13日公開の『プライベート・ウォー』で、左目を黒眼帯で覆った実在の女性戦場記者の役を演じるが、美人はどんな姿をしても美人。そんな職業婦人の凛々しい姿がカッコ良ければ、本作に見る西部の強い女役も、彼女にはピッタリ。これは、『ゴーン・ガール』（14年）でのエイミー役を彷彿させるものでもある（『シネマ35』159頁）。クウェイト家の焼け跡で赤子の亡骸を抱きしめながら座っていた彼女が、たまたま救出してもらったジョー大尉御一行と行動を共にしたのは当然だが、中継点のコロラド州にあるウィンズローの町にたどりつくまでの旅は、ロザリーにとっては過酷なもの。毎日の野営が大変なら、コマンチ族の襲撃にもビックリしただろう。したがって、ウィンズローの町に着けば、そこでゆっくり風呂に入り、おいしい食事をとり、1泊か2泊した後、大陸横断鉄道に乗って新しい人生を……。そう考えてジョーは中佐（ピーター・マラン）にロザリーを預けたが、さてロザリーは……？

他方、ジョーはそこで中佐から、インディアン一家を惨殺した罪で拘束中のウィルス軍曹（ベン・フォスター）の護送を依頼されたから、アレレ……。イエロー・ホークの護送だけでも大変なのに、さらに囚人の護送まで！ベリンジャー砦を出発した時ジョーは4人の部下を同行していたが、コマンチ族の襲撃で死傷者が出ていたから、今のジョーは戦力不足気味。そのうえ、インディアン戦争時のジョーの部下で、当時はジョーに大きな信頼を寄せていたウィルス軍曹だが、現在のジョーに対しては「野蛮人を護送するとは、変わっちゃったもんだ」と侮蔑の言葉を投げつけていたから、ウィンズローの町からモンタナに向かう旅は不安いっぱいだ。もちろん、ウィルス軍曹は拘束中の身だから、馬での移動中は常に鎖でつながれ、野営中も木の根っこに縛り付けられていたが、モンタナまでそんな旅が何日も続けば、どこかで何か問題が起きるのでは？さらに、末期ガンに侵されているイエロー・ホーク氏の病状は次第に悪化していたから、雨風をしのぎながらの長旅は大変だ。

他方で、いいニュースは、旅の中でイエロー・ホークの家族と心を通わせたロザリーが、ウィンズローの町からもジョー大尉一行に加わったこと。これによって、一行は何かと彼女に助けられることが増えたが、ある日、野盗によってイエロー・ホークの娘が誘拐される事件が起きると……。さらに、私たちが予想していた通り、ある日の野営で、大雨の中、木の根っこに縛られたウィルス軍曹が鎖を外してくれるよう頼むと、そこから起きた凄惨な事件とは？

## ■□■やっとモンタナに到着！しかし、土地は誰のもの？■□■

日本に土地バブルが吹き荒れ、「地価高騰が日本を変える」と議論されたのは、1980年代後半だ。1989年12月に「土地基本法」が制定されたが、その時は既に不動産融

資の総量規制をはじめとする各種の土地政策によって、土地バブルは終焉を迎え、以降の平成の時代は、「失われた10年」、「失われた20年」と呼ばれる時代になった。そんな時代状況下、NHKは1987年10月に「世界の中の日本 土地はだれのものか」を特集し、空前絶後の反響を呼んだ。

本作では、ジョーは次々とやってくる“災難”の中で次々と部下を失いながら、今やつとモンタナの美しい景色を目にする所まで到着した。もともと、この時は既にイエローの命は尽きていたから、ジョーやロザリー、そしてイエローの家族は、彼の遺体を故郷の土に埋めることが大きな役割になっていた。しかして、突如そこで起きたのが、「土地は誰のものか」という問題だ。考えてみれば、アメリカの広大な土地に昔から住んでいたのは、先住民のインディアンたち。そこに、突然外から足を踏み入れて土地を奪っていったのは、17世紀に入植を開始したイギリス人の清教徒たちだ。アメリカ大陸の東部で最初に始まった先住民と入植者との戦いは、騎兵隊の登場、西部開拓の進行の中で、大陸全土に広がり、コマンチ族はもとより、北西部のモンタナ州にいたシャイアン族も全て敗北し、保留地に押し込められてしまった。

しかして、今モンタナ州に到着したジョーたちの前には、3人の息子を従えた“地主”の男が登場したが、彼のセリフは「俺の土地にインディアンを埋めるな」「俺の土地からすぐに出て行け」というもの。これに対してジョーは、「この土地はもともとイエロー・ホークたちシャイアン族の土地だ」と反論したが、さて、この議論はどちらが正しいの？そして、この土地は誰のもの？

1987年の時代なら、それは「土地は誰のものか」というテーマで議論すればよいが、1892年の口よりも銃がモノを言うアメリカでは、その解決は如何に・・・？異色の西部劇たる本作のそこでの結末と、そこで起きた最後の事件後にジョーが見せる苦悩とは・・・？それらは、あなた自身の目でしっかり確認し、きちんと総括したい。

2019（令和元）年9月13日記